お茶の水女子大学心理臨床相談センター 第２回公開セミナー 開催報告

山田　美穂　お茶の水女子大学 基幹研究院／コンピテンシー育成開発研究所
石丸　径一郎　お茶の水女子大学 基幹研究院
高橋　哲　お茶の水女子大学 基幹研究院
平野　真理　お茶の水女子大学 基幹研究院
砂川　芽吹　お茶の水女子大学 基幹研究院
山口　千晴　お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
児玉　美希　お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
森　裕子　お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
笠原　千秋　お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
出水　友理亜　お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
廣田　愛海　お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
岡本　みどり　お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
オルム　デザイア　世田谷区 心理教育相談員
金澤　英莉　東京認知行動療法センター
河田　あかり　お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
此下　千晶　お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
最首　優希　お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
齋藤　仁美　お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
髙橋　あゆみ　お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
岩壁　茂　立命館大学　総合心理学部

内容

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　当日の概要（1. 当日のプログラム／2. シンポジウム／3. 相談センター・コース紹介／4. 分科会）
Ⅲ　登壇者・参加者による振り返り（1. 分科会登壇者による報告／2. アンケート結果／3. 指定討論者・岩壁茂先生から）
Ⅳ　おわりに

Ⅰ　はじめに

2023 年 3 月，「女性の人生と心理臨床」をテーマに，第 2 回公開セミナーをオンライン開催することができました。

普段，「女性」というテーマを意識しながらセンターの活動を行っているだろうか？と振り返ると，実際のところはそれほど強く意識したり頻繁に話し合ったりしてはいないように思います。女子大学ならではの活動をすべし，というような特段の要請があるわけでもありません。「女

性」と心理臨床活動をどう関連させて考えればいいのかについては，センターでも，心理臨床業界全体でも，まだまだ十分に語り合えていないという側面もあるかもしれません。

しかし，心理相談を申し込んでくださる方々の中には，自分が女性だから，女子大学なら安心だと思ったから，という理由を話してくださる方が，少なからずいらっしゃいます。プレイセラピーに来られた女の子たちが，大学院生の「お姉さん」や伝統ある女子大学の雰囲気にキラキラした憧れのまなざしを向けてくれている場面にもよく出会います。心理臨床相談センターを運営する上では，つい，大学の規模の小ささ，学外の方の入構しにくさ，男性スタッフの少なさ等々，女子大学特有のやりにくさに目が向いてしまいがちなのですが，なるほど，女子大学の附属だからこそできることもたくさんあるんだ…と，当センターを選んで申し込んでくださる方々から気づかせていただいています。

そう考えてみると，「女性の（女性による，女性のための）心理臨床」とは，大きな声で強調されてきたわけではないとしても，センターでの臨床実践と研究に通底するテーマであるとも言えます。大学院生も教員も，何らかの形で「女性」にかかわる研究をしている人がかなり多くいます。また，センターの構成員は教職員と大学院生をあわせると 50 人を超え，そのほとんどが女性です。スタッフの大半が，「女性の人生」を生きながら，ライフサイクルにおける様々な発達課題に直面し，ワークライフバランスに悩みながら，心理臨床活動に携わっているというのが，私たちのリアルです。

そのような背景から，「女性の人生と心理臨床」というテーマが決まりました。もちろん，センターの中では貴重な男性スタッフの声も大切に，臨床実践や研究の対象としての女性，そして実践家，研究者としての女性，という大きく二つの側面から，「女性の人生と心理臨床」について語り合うことができれば，お茶の水女子大学心理臨床相談センターだからこその試みになるかもしれないと考えました。

また，第 1 回で大学院生スタッフが活躍してくれたことを踏まえ，大学院生がさらに全面的に参画し，日々の臨床活動・研究活動では経験できない学びを得られる機会にするということも，今回ぜひとも叶えたかったことでした。発案・企画の段階から実行委員会を立ち上げ，申込受付，広報，全体司会，アンケートの実施に至るまで，大学院生スタッフが協力し合って進めました。今回の目玉であった第Ⅲ部の「分科会」も，ほぼ大学院生自身が取り仕切りました。「女性のこころとライフイベント」をテーマに，学会形式の研究発表，実践報告，臨床経験と研究をめぐる対談，院生生活についてのパネルディスカッションなど，内容も形式もバラエティに富んだ企画は，どれもとても刺激的で魅力的な時間になりました。終了後の登壇者たちの「緊張したけれど楽しかった！」という弾んだ声と充実した笑顔が，とても印象に残っています。

第Ⅱ部でも，大学院生による心理臨床相談センターと発達臨床心理学コースの紹介が短時間ですが行われました。残る第Ⅰ部のシンポジウム「女性のための心理臨床」では，教員が専門領域を活かした独自の視点から話題提供を行い，立命館大学の岩壁茂先生に指定討論をしていただきました。第 1 回公開セミナー「感情の傷つきと心理臨床」では，岩壁先生の本学ご退職に際してのご講演（最終講義）をしていただき，それを受けて他の教員がミニ講演を行うという形式でしたので，今回は立場を逆にして，攻守交替（？）でのコラボレーションが実現できました。

さて，次節以降は登壇者・実行委員による報告です。ぜひ当日の様子をイメージしながらお読みいただき，ご感想などをお寄せいただければ幸いです。

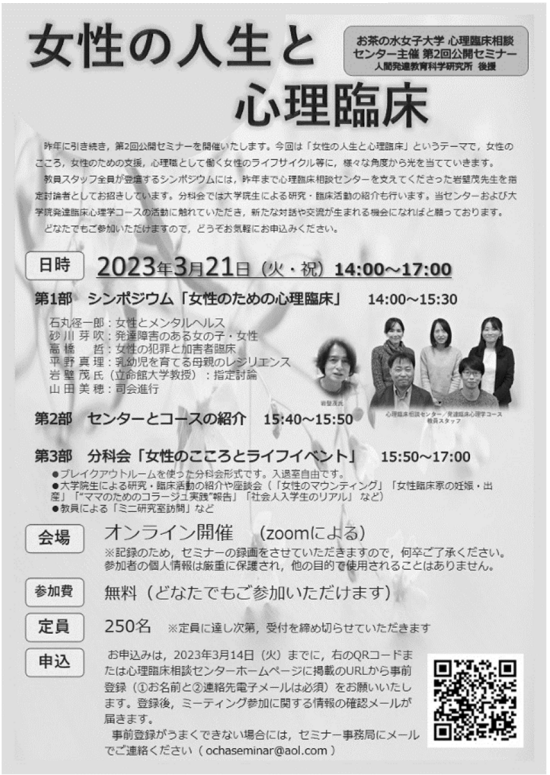
（山田美穂）

Ⅱ　当日の概要

1. 当日のプログラム

2023 年 3 月 21 日（火），お茶の水女子大学心理臨床相談センター主催第2回公開セミナー「女性の人生と心理臨床」がオンライン開催された。尚，本稿の中での肩書は，セミナー開催時のものである。本セミナーは，河田あかり（本学大学院博士前期課程）による司会のもと，本学大学院発達臨床心理学コース教員である石丸径一郎准教授，高橋哲准教授，平野真理准教授，山田美穂准教授，砂川芽吹助教と，2022 年度まで当センター長を務められた岩壁茂先生（現・立命館大学教授）による《第 1 部：シンポジウム「女性のための心理臨床」》，《第 2 部：相談センター紹介・発達臨床心理学コース紹介》，本学発達臨床心理学コース／領域の院生による《第 3 部：分科会「女性のこころとライフイベント」》というプログラム構成で行われた。事前に配布した広報チラシを Figure 1 に示す。

Figure 1　公開セミナーチラシ



2. シンポジウム

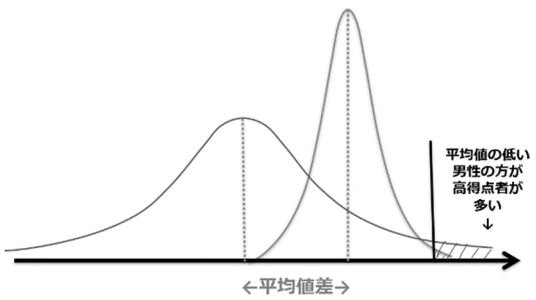
第 1 部：シンポジウム「女性のための心理臨床」では，山田美穂准教授による司会のもと，同コース教員 4 名が登壇し，「女性」というテーマとそれぞれが専門とする臨床分野とを関連づけて話題提供が行われた。その後，岩壁茂先生から指定討論が行われた。以下にその概要をまとめた。

1）話題提供

1 人目の登壇者の石丸径一郎准教授は，「女性とメンタルヘルス」というテーマで論じた。まず，統計的に性差（群間差）が認められるとは，男女の分布を比較した際に，分布傾向は共に正規分布に近いものになるが，重なりを持ちつつ位置にずれが認められることだという。さらに，男女で平均値が違うだけでなく，分散も異なるパターンがある。その場合，例えば精神疾患のスクリーニングのように，ある点数で正規分布の曲線が区切られると，男女差が異なって見える場合がある。このように，統計的に考えると性差の有無の捉え方は複雑であるとした。

近年，研究に性差の視点を取り入れる動きが活発化しており奨励されている。石丸准教授はその例として，本学が 2022 年度より設置している「ジェンダード・イノベーション研究所」を紹介した。学問分野により着目する性差の視点は異なるが，臨床心理学では，生物・心理・社会（環

Figure 2　群間での分散差



境）全ての側面から等しく重視される。石丸准教授は，うつ病の生物・心理・社会（環境）要因における性差に関する先行研究を紹介した。また女性の特有の要因として，月経前不快気分障害や産後うつ病等の要因とされるホルモンの影響，ストレスの高さ，ライフステージの変化，パートナーとの関係等が明らかになっていると述べた。

2 人目の登壇者である砂川芽吹助教は，「発達障害のある女性・女の子」というテーマについて論じ，本センターで 2021 年度より本センターで実施中の自閉スペクトラム症（以下「ASD」という。）のある女の子と保護者を対象とした親子支援プログラム「あまなつ茶ぁむ」について紹介した。発達障害のある女性や女の子が抱える特有の困難さは，思春期以降に顕在化しやすいとされる。一般的に思春期になると心身に変化が起こるものの，発達障害のある女性は発達特性により体の内外の状態を把握し，表現することが苦手だと考えられている。また女性は，自らの発達特性を隠すカモフラージュといった適応行動や，女性を取り巻く社会環境的要因によって発達特性や困難が見過ごされる可能性がある。しかし女性の発達障害の有病率は男性と比較して少ないことから，女の子特有の困難さや支援に焦点が当たりづらいという。このことから，砂川助教は発達障害のある女の子を対象とした臨床心理学的支援の必要性を訴えた。

本センターで実施中の「あまなつ茶ぁむ」では，ASD のある女の子と保護者を対象に「こころ」と「からだ」の両側面からアプローチを行い，彼女達が自分らしく生きることを目的とした支援を行っている。砂川助教は，発達障害のある女の子の支援において，スタッフと参加者がともに今ここにある感情や感覚を共有し，お互いに認め合い，素の自分をさらけ出せるような環境にすることが重要であると述べた。

3 人目の登壇者の高橋哲准教授は，「女性の犯罪と加害者臨床」というテーマで，①女性の犯罪の特徴と②非行少女の「嬰児殺」の二つについて論じた。まず，①女性の犯罪の特徴について，1 年間で検挙される犯罪者のうち，女性が占める割合は 1970 年代後半から現在まで一貫して 2 割程度である。女性の犯罪の内容については大多数が窃盗，主に万引きであり，女性が凶悪犯になることが非常に稀であるという。また女性の場合，犯罪の動機がネガティブな状況から逃れるためではないかという考えを，薬物事犯を例に挙げて述べ，女性の犯罪が男性と比べて少ないのは，犯罪で得られるものが少ないと認識している女性が多く，また，女性が犯罪をすることについて，社会の許容の程度が男性と比べて低いからではないかという考えがあることを説明した。さらに問題行動があった際に，対応が求められる社会的な制度や機関について，女性加害者の場合には医療機関がその役割を担うことが期待されると述べ，これらのことから男性と女性は犯罪におよぶ文脈が異なり，その後の対応も異なることを説明した。

次に②非行少女の嬰児殺について，嬰児殺とは生後 12 ヶ月未満の者に対する殺人であり，女子による殺人で最も多く，追い詰められた母親が嬰児殺におよぶ構造が昔から現在にかけて続いているという。嬰児殺に関する研究（近藤，2008）では，嬰児殺におよんだ女子少年を抑制型，不安定型，未熟型の 3 つの類型に分けて説明している。高橋准教授は実務の実感としてこれらに当てはまりを感じ，それぞれによって今後の対応や介入を変えるべきなのではないかと論じた。最後に，女性の加害者臨床について高橋准教授の考えが述べられた。まず，嬰児殺のような犯罪において母親だけが罰せられる社会について，個人の責任と社会の責任のバランスの難しさがあるという。次に，女性加害者の場合，被虐待歴と自殺関連行動の割合が高いことを取り上げ，加害者である一方，被害者としての側面もあるため，どちらから介入すべきなのかという

議論が生じることも女性の加害者臨床の特徴ではないかと述べた。

４人目の登壇者の平野真理准教授は，「乳幼児を育てる母親のレジリエンス」というテーマで論じた。まず，元々物理学の用語であるレジリエンス（resilience）の定義について，辞書的な定義は，物が何か衝撃を受けた時に元に戻る力のことであるが，心理学では「辛い状況や強いストレスフルな出来事にさらされ，傷ついた中でも心を回復させて適応していける力」であるとされていると説明した。つづいて平野准教授は，母親がレジリエンスを高めるための方法について注目されている現状に，違和感を覚えると述べた。そして，産後うつやレジリエンスなどの全てが母親個人の中で起こっている問題と認識されやすくなっている風潮が生まれていると論じ，母親はケアの対象としては認識されるが，周囲はその問題に影響を与えている当事者であるという意識は薄くなっていると問題提起をした。母親を取り巻く状況について，親は親になった瞬間によき親になる義務のようなものを押し付けられるという。自治体の妊婦・母親向けの講座には，よい母親になるための講座が並んでおり，このような情報は，社会の中で母親に対する「母親はこうしなければならない」という暗黙のプレッシャーとして存在していると述べた。そのため，母親の精神的健康の問題を，生物学的な面だけではなく社会との関係で生じている物として扱っていく必要があるという。乳幼児の母親を対象とした特別区長会調査研究機構の 2020 年の調査では，人生満足度や親としての効力感は，自らが“女性はこうあるべき”と認識している母親の方が高い一方で，レジリエンスは，性役割のプレッシャーをやや認識している母親が最も高かった。したがって，平等的な性役割の認識を社会との対比の中で適度に意識することは，レジリエンスを高める可能性があると示唆された。平野准教授はこれらのことから，これからの社会に求められる母親支援として，ひとりの人間として学ぶ・楽しむ権利を提供するサポート，怒りや悲しみの気持ちも大切にするためのサポートが重要であると述べた。

2）指定討論

岩壁先生ははじめに，ジェンダー学者・ジュディス・バトラーの言葉を取り上げ，ジェンダーは生物学的側面だけでなく，社会的，経済学的，政治的，歴史的側面も関わっており，理想とされるジェンダー像は社会と共に変化してきていることをあげた。そのうえで，臨床心理学においてジェンダーの視点から考える必要性について，母子並行面接を例に述べた。

続いて岩壁先生は，教員 4 名の発表についてコメントした。石丸准教授の発表に対しては，男女比較は臨床において有用な知見が得られるとしながらも，男女間だけでなく同性内の差（郡内差）にも注目する必要について指摘した。砂川助教の発表について岩壁先生は，「あまなつ茶ぁむ」の取り組みのうち「性教育・からだに関するテーマを取り入れている点」が特に興味深いとし，自分を隠そうとするような児童にとって，からだに触れる体験は，安心感や素の自分を認められるようになる重要な取り組みであると語った。

また高橋准教授が取り上げた嬰児殺については，嬰児殺は犯罪なのか，個人，家族，社会の問題なのか，また女性が追い詰められる状況はどのように作られるかを考慮する必要があり，社会に問うものが大きいと述べた。また，嬰児殺は責任の所在の追及が難しく，減少させるためにどのようなことができるかを考えることが課題であると指摘した。さらに，平野准教授が取り上げた産後うつについては，男女でのうつの違いが顕著に表れている精神疾患である点，また文化差も関わっている点に関心を持ったと述べ，このようなテーマについて研究が増えることを期待するとした。

最後に，ジェンダーについて研究し，臨床的に

扱うためには，人々の間で当たり前とされているタブーを疑問視し見直す必要があること，意見の違いを尊重し，自由な発言ができる安全な場所を作ることが重要性であると述べた。

3）ディスカッション

指定討論の後，参加者からの質問や感想が寄せられ，岩壁茂先生の指定討論を踏まえた各教員のコメントで第 1 部は締め括られた。

3. 相談センター・コース紹介

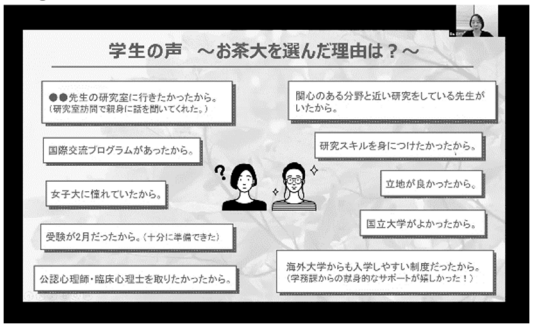
センターの学生代表・出水友理亜（本学大学院博士後期課程）より，心理臨床相談センターの紹介（センターの目的，相談内容の例，相談等の種類，施設紹介，相談員について，相談の流れ，およびアクセス方法）がされた。また岡本みどり（本学大学院前期課程）から本学大学院発達臨床心理学コース・領域の紹介がされた。（Figure 3，4）

4. 分科会

第 3 部：分科会「女性のこころとライフイベント」では，本学大学院発達臨床心理学コースの博士前期課程及び博士後期課程の院生による「女性に関する」研究や実践の紹介「女性である院生自身に関する対談をブレイクアウトルームに分かれて行った。分科会の内容等について，詳しくはⅢ.登壇者・参加者による振り返りで述べる。

Figure 3　センター紹介の様子

Figure 4　コース紹介の様子



院生による分科会は計 3 グループで行われた。分科会 1 では，児玉美希（本学大学院博士後期課程）による司会のもと，研究・実践発表が行われ，森裕子（本学大学院博士後期課程）から「女性のマウンティング」，出水友理亜・笠原千秋・廣田愛海（本学大学院博士後期課程）から「ママのためのコラージュ」，此下千晶（本学大学院博士前期課程）から「アロマンティック／アセクシュアル女性のアイデンティティ」というテーマの発表の後，参加者との質疑応答が行われた。分科会 2 では，山口千晴（本学大学院博士後期課程）とゲストの横浜市立市民病院の心理療法士である土屋真弓先生から「心理臨床家の妊娠と出産」をテーマにした研究紹介と，妊娠を機に現場を去った心理士とそれを見送った心理士との対談を行った。分科会 3 では，オルムデザイア・金澤英莉・齋藤仁美・最首優希（本学大学院博士前期課程）による，社会人経験をしてから大学院に入学した体験談を紹介した後，参加者との質疑応答を行った。

（出水友理亜・岡本みどり・河田あかり・
高橋あゆみ）
（Ⅱ総括：石丸径一郎）

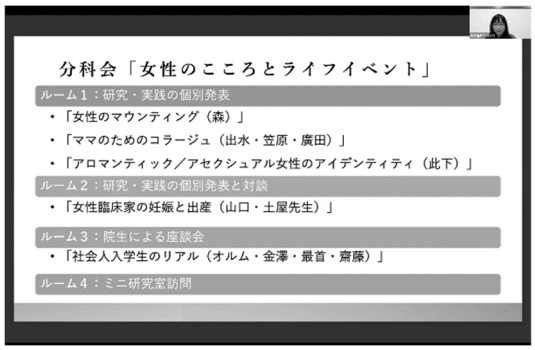
Ⅲ　登壇者・参加者による振り返り

1. 分科会登壇者による報告

分科会では「女性のこころとライフイベント」というテーマで，大学院生による研究・臨床活動や，大学院生活・キャリアについての報告・座談

会を実施しました（Figure 5）。参加者の方には，Zoom のブレイクアウトルーム機能を使い，興味のある分科会へ自由に出入りしてもらい，コメントや質問などをいただきました。以下では，3 つの分科会の担当者による，まとめと振り返りを報告いたします。

Figure 5　分科会紹介の様子



1）分科会１：「大学院生による研究・臨床活動報告」

発表 1「女性のあいだで起こるマウンティング」

私は，分科会 1 の最初の発表として，「女性のあいだで起こるマウンティング」というテーマで発表を行いました。マウンティングとは，従来は動物の順序確認行為を指していたものが，人間の行動を表す際にも用いられるようになり，自分の方が立場が上であることを言葉や態度で示す行為を指します。発表では，特に女性同士のあいだで起こるマウンティングに注目し，マウンティングを受ける女性に介入することで，女性同士のマウンティングによる傷つきやモヤモヤを解消していくことができるのではないかと論じました。それに対し岩壁茂先生から，マウンティングは加害者と被害者にはっきりと分けられるものではなく，加害者とされる女性もマウンティングによって傷ついた過去を持つのではないかとご指摘いただきました。マウンティングをする女性についての検討は十分にできておらず，ご指摘いただけたことによって，より女性同士のマウンティングについて多面的に理解することができるようになったと感じております。他のフロアのみなさんからいただいたコメントも大変参考になりました。今後も研究を重ねていこうと思います。ありがとうございました。

（森裕子）

発表 2「アロマンティック／アセクシュアルのアイデンティティとメンタルヘルス」

近年，同性愛や両性愛の権利に対する社会的関心が高まっており，「誰もが愛する人を愛する権利がある」ことを尊重する国際的動向がありますが，その中で他者に恋愛的に惹かれないアロマンティック，性的に惹かれないアセクシュアルは不可視化されやすいという課題があります。私はアロマンティック／アセクシュアルのアイデンティティとメンタルヘルスについて研究しており，自分の研究内容を知っていただきたい，初めて聞く方に伝わる内容になっているか確認したい，という思いで発表させていただきました。発表後，口頭またはチャットにて多くの質問・感想をいただけたことで，興味を持っていただけるポイントや伝え方を工夫すべき点に気づくことができました。研究室に籠って黙々と進めているだけでは独りよがりな研究になってしまう恐れがあるため，このように一般公開の場で発表し，多様な視点からご意見をいただけたことは大変有意義でした。

（此下千晶）

発表 3「ママのためのコラージュ実践報告」

分科会 1 の最終セッションでは，博士後期課程 1 年の 3 名により「ママのためのコラージュ実践報告」として，瓶を使ったコラージュの実践を報告しました。瓶を使ったコラージュとは，透明な小さな瓶の中に，ビーズや綿，その他毛糸や小石などの素材を入れて，自分の中にある様々な気持ちを表現するものです。この瓶のコラージュは，博士後期課程の授業の中で，育児中の母親の支援を考える過程で考案しました。セッションでは，育児期の母親をめぐる支援の必要性

から，コラージュを予防的心理支援に有効に取り入れるための工夫，瓶コラージュの開発過程などを説明し，実際のワークショップの実践を報告しました。セッションに参加いただいた方々の中には，今後実践研究を行う際のモニターに登録してくださった方もいらっしゃいました。今後は効果検証を行い，内容をブラッシュアップして，より多くの実践の機会を作りたいと考えています。

（笠原千秋・廣田愛海・出水友理亜）

分科会１のまとめ

分科会 1 では，以上のように，「女性の人生と心理臨床」に関連した 3 つの研究や実践を発表致しました。3 つの発表は，性格特性や指向，立場が異なっても，どんな女性も「誰一人取り残さない」社会の実現に寄与する題材ばかりでした。今回は，特に，お仕着せの分類に無理に当てはめて捉えようとするのではなく，新たな価値観や枠組みを生み出していくということが意識されやすい題材であったように思われます。また，分科会を通じて，普段直接やりとりをする機会の少ない皆様に，研究内容を知っていただき，貴重なご意見をいただけたり，また，新たな観点からご質問をいただけたりしたことで，どの発表者も取り組みの社会的な意義を見直すきっかけにつながりました。

研究と実践の両輪が相互に影響を及ぼしあい，高め合って行くさまが意識され，また，体験できるような，充実した分科会が展開されました。

（児玉美希）

2）分科会２：「女性臨床家の妊娠・出産」

はじめに

分科会ルーム２では「女性臨床家の妊娠・出産」についての発表を行いました。筆者はこの数年の間に妊娠・出産をし，幼い子どもの育児中であるという背景があります。出産前は，某大学付属の心理相談センターと，某県にある総合病院の神経精神科で臨床活動をしていました。妊娠中の臨床活動は決して易しいものではありませんでしたが，とても意義深い時間だったと感じます。まさにこの数年間は第 2 回公開セミナーのテーマである「女性の人生と心理臨床」について常に問い続けた期間でした。自らの体験を皆様と共有し，“一人の女性，一人の人間として生きることと，心理臨床家として生きること”について一緒に考える時間にしたいという思いで発表準備を始めました。

発表の概要

発表では，筆者の研究の紹介と，総合病院に勤務していたときの上司で臨床心理士・公認心理師の土屋真弓先生との対談を行いました。

【研究紹介】

筆者の研究テーマは心理臨床家の妊娠・出産についてです。心理臨床家が妊娠をすると，クライエントもセラピストもあらゆる困難を体験します。一方，心理面接に重要な展開をもたらしたり，心理臨床家の職業的な発達を促したりすることもあります。筆者自身，妊娠中の臨床活動で深く思い悩んだときに同テーマの先行研究にもとても助けられたため，さらに研究を発展させたいと思い至りました。具体的には心理臨床家の妊娠をめぐるセラピストとクライエントの体験や，妊娠中に受けるスーパーヴィジョンについて扱っています。妊娠中の心理臨床家とそのクライエントの体験を詳細に捉え心理状態の変遷を辿ることや，心理臨床家への支援の在り方を検討することで，両者の心身の健康に広く貢献することを目指しています。

【対談】：出産のために職場を離れる心理士と，見送る側の心理士の体験

続いての対談では，(1) 妊娠がわかったとき～今後についてそれぞれどんなことを考えていたか～，(2) 退職の日が決まり，去る準備をしながらクライエントに会う日々～困ったエピソード・良かったエピソード～，(3) 出産のために心理士が去ってから～臨床現場に残された課題，

マネジメントの心得〜，という３つのトピックを扱いました。話す中で，筆者も土屋先生もそれぞれに不安や責任感，喜びを感じていたことが改めて分かりました。共に温かな涙が溢れ出す場面もあり，当時の緊張感が時を経て解けていくようにも思われました。そして，土屋先生から「クライエントにとっても，セラピストが変化していく姿は成長するモデルになりうる」「幸せになることに負い目を感じる必要はない」というメッセージをいただけたことは，罪悪感が特に生じやすい心理臨床家の妊娠というテーマにおいてとても大きな贈り物だったように思います。同じ領域に生きる先輩や仲間に支えられる心強さと，クライエントとわが子，そして自分自身の人生に対しても愛着を深く感じ，心理臨床家として歩んでいくことに希望を持てる時間となりました。

おわりに

このように，筆者にとって非常に重要な時間となったと同時に，フロアの皆様とあまり交流できなかったことが少し心配でもありました。しかし発表後に，フロアの方々からの心のこもった感想がたくさん届き，言葉にならないほどの一体感と安堵を感じました。発表が皆様にとっても意味のある時間になったのならこれほど嬉しいことはありません。見に来てくださいましたこと，深くお礼申し上げます。また，岩壁茂先生も温かなコメントとともに発表を見守って下さいました。心より感謝申し上げます。今後の研究を通して，心理臨床家が一人の人間として様々なライフイベントを迎えることについて考え続けていきたいと思います。そして筆者の妊娠中から出産後まで常に寄り添い，今回の対談も快く引き受けてくださいました土屋真弓先生，本当にありがとうございました。この対談で得られた気付きを大切に抱えて，これからも歩んでまいります。

（山口千晴）

3）分科会３：「社会人入学生のリアル」

概要

分科会３では，「社会人入学生のリアル」をテーマに，4 名の社会人経験を経て大学院に入学した学生によるパネルディスカッションを行いました。様々な経歴を経て大学院への入学を検討されている皆さんの参考になるような，リアルなお話ができたらという思いで企画しました。パネリスト学生の経歴は多様で，大学での専攻，社会人歴の長さや，現在のライフスタイルも異なります。導入のパネリスト紹介では登壇者の経歴と，なぜ大学院，そしてお茶大への進学を決めたのかについてお話ししました。そして，それぞれに異なるバックグラウンドのパネリストが共通してお話しできる三つのトピックに沿ってお話をしました。トピックの一つ目が，社会人を経ての大学院生活で難しさを感じること，二つ目が，反対に社会人生活が強みになっていると感じること，三つ目が現在の関心と将来のキャリアです。それぞれのトピックで大学院進学までの葛藤や，大学院生活と家庭や育児との両立の難しさ，工夫，キャリアを中断したからこそ得られる視点について，お話をしました。パネルディスカッションの終了後は参加者の皆さんからの質問に時間一杯お答えしました。受験勉強の工夫や使っていた教材についてなど，大学院への進学に際して参考にしていただけるお話しをすることができました。

発表の目的やねらい

企画段階では，分科会 3 の主なオーディエンス層は本学大学院の受験を検討している方であるという想定のもと，内容の検討を進めていきました。以前通っていた予備校にポスターの掲示をお願いするなど，ターゲットに合わせて広報も工夫しました。「社会人入学生のリアル」のパートのうち入学前の情報としては，受験を検討している方が喫緊の課題として最も興味を持っているであろう「受験勉強」について個々のユ

ニークな受験対策を含めお話しました。この部分はオーディエンスの求めている情報を提供することを目的としました。実際 Q&A パートで最も多かったのは受験勉強に関する質問でした。入学後の生活については，現役生とは異なる難しさを感じる部分も素直にお伝えした上で，それらを補う工夫を示しました。これにより，家事・育児等と学業の両立は簡単なものではないが，やり方次第で対処可能なものであることを伝えることを意図していました。臨床・研究については社会人ならではの強みや経験を活かせるところを中心にお伝えすることにしました。これまでのキャリアが無駄になるどころか実は予想以上に活用できる経験が多い，という語りは受験を迷う社会人経験者にとってなかなか触れる機会はないものの，意志決定する上で重要な情報なのではないかと私たちは考えています。

当日の雰囲気や内容

一つ目のトピックである，社会人を経ての大学院生活で難しさを感じることでは，仕事を辞めて大学院へ進学することの葛藤や，周囲にロールモデルがいない中で自分の将来を想像することの困難さなどの話が出ました。また，既婚者や子どもを持つ学生もおり，いかに研究時間を確保するかということに関して，授業と実習が入る曜日や時間帯の紹介と併せて，時間捻出のための具体策もお話ししました。二つ目のトピック，社会人生活が強みになっていると感じることについて，臨床場面では仕事やライフイベントの悩みを抱えるクライエントさんたちの問題に対しイメージを持ちやすくなることなどが挙げられ，研究場面では他分野を経験しているからこそ持てる問題意識や視点などが挙げられました。三つ目のトピックである現在の関心と将来のキャリアでは，各学生の研究テーマを改めて紹介し，将来どんな分野で活躍していきたいと考えているかをお話ししました。最後に，Q&A の時間では，大学院入試に向けた学習方法や，臨床心理士資格のみ取得の場合の活動領域に関する質問などを頂き，それぞれについて時間一杯お答えしました。参加者のみなさまにも関わって頂き，和やかな雰囲気の中で社会人経験者たちの学生生活をお伝えできたように思います。

（オルムデザイア・金澤英莉・齋藤仁美・最首優希）

2. アンケート結果

本セミナーでは，参加者の属性・ニーズの把握を目的とし，アンケートを実施した。今回は 60 名の方から回答を頂いた。

1）基本情報

参加者の年代は「10 代以下」10.2%，「20 代」32.2%，「30 代」11.9%，「40 代」22%，「50 代」20.3%，「60 代」1.7%，「70 代以上」1.7%という結果だった。属性（複数回答可）は「お茶大の教員・学生」20.7%，「大学院進学を検討している人」20.7%，「医療・教育・福祉・産業・司法で働いている人」20.7%，「お茶大以外の大学生・大学院生」19%，「お茶大の OG」15.5%，「臨床心理士・公認心理師」13.8%，「一般」12.1%であった。セミナーを知ったきっかけ（複数回答可）は「大学 HP」28.3%，「チラシ」23.3%，「SNS（Twitter など）」18.3%，「知人の紹介」16.7%，「メール」16.7%という結果だった。

2）満足度について

「とても満足」が 66.7%，「やや満足」が 31.7%と多くの参加者に満足していただいたことが窺える。

3）次回以降取り上げて欲しいテーマや要望

「女性のキャリア，女性心理職のキャリアにおける困難」「女子大ならではの視点からジェンダーやセクシュアルについての話」「女性と心理臨床，ジェンダーと心理臨床」「社会人のメンタルヘルス」「先生の専門を中心に，心理臨床における活躍フィールドや実践内容」等であった。

「女性と心理臨床」のテーマに興味のある方が多く参加されており，特に「女子大」ならではの視点で，ジェンダーやキャリアの話をさらに聞きたいというニーズを認識した。

4）感想

「一般にも公開してくれてありがたい。オンラインなので参加しやすかった」「社会人入学生の話は受験を考える上で参考になった。どのように研究テーマや研究室を選んだのか，さらに詳しく聞きたい」「自分も女性であるという視点で臨床心理学を捉えたことがなかったことに気が付いた」「アロマンティックなど，あまり聞いたことのない話が聞けて刺激を受けた」等であった。長文やポジティブな感想が多く寄せられ，登壇者やスタッフにとって大きな励みとなった。最後に，参加者及びアンケートに協力してくださった方へ感謝申し上げます。

（最首優希・髙橋あゆみ）

（Ⅲ - 1・2 総括：砂川芽吹・最首優希）

3. 指定討論者・岩壁茂先生から：「女性の人生と心理臨床に参加して」

公開セミナーに，指定討論として参加させていただき，とても光栄です。テーマもとても興味深いですが，教員全員による発表があり，心理臨床相談センターで相談員を務める院生の皆さんが，準備や運営をされ，コースとしての結束力や協力が光る会でした。

女性というテーマは，お茶大に常に期待されるテーマであるがゆえに扱いにくいテーマでもあるように思います。それを各教員がそれぞれの専門から解説し，そして学生が取り組むジェンダーとかかわる研究発表という面からアプローチした本会は，本当に大きな意義がある会であったと思いました。ここでは，本公開セミナーから自分が考えたことを少し紹介させていただきます。

臨床心理学における暗黙のジェンダー像

心理学という分野をみると，現在では女性が中心になっています。世界的にみても心理学を専攻する学生は圧倒的に女性が多く，日本で心理士として働く人も，女性が 75%くらいを占めると言われています。もう一方で，臨床心理学では，歴史的に人間の捉え方自体が男性中心的であり，そのような見方の偏りが分野全体に染みついていることが指摘されています。たとえば，精神分析では，エディプスコンプレックスや母子関係などでみられるように性役割が固定されていたものとして捉えられてきました。また，自立，冷静さ，論理性，積極性，などをはじめとして「男性的」特徴が心理的成熟を示す特徴とされ，女性的とされる特徴は，幼さや未熟さと結びつけられてきました。これは，精神力動療法だけでなく，認知行動療法，ヒューマニスティックアプローチの心理療法にも広くみられます。女性は，生まれつき子どもを優先し，愛情を向け，養育ができるという母性神話があり，女性が子どもを産むこと，そして育児をするだけでなくそこに生き甲斐を見いだすことを当たり前とするような風潮が社会には強くあります。このような風潮は臨床実践にも少なからず影響を与え，私たちは時にその影響を見落としていることがあります。その一例としては，母子並行面接があります。母子並行面接は，日本における子育ての実情を考えるととても有効なアプローチの 1 つであることは間違いありません。しかし，母と子どもが面接にやってくる場合，子育てに影響を与える夫婦関係，そして家族に影響を与える社会的圧力などをそぎ落として，母親が子育ての担い手になるべきだという社会的な見方を暗に押しつけることにもなりかねません。

ジェンダーの心理学

アメリカでは 1970 年代からフェミニストカウンセリングが広がり，心理学におけるジェンダーの問題についての関心が高まっています。

女性だけでなく，社会における様々な差別や偏見などを是正し，社会的な問題を個人の心理的問題として誤って回収してしまわないようにすることは，その後，多文化カウンセリングにも引き継がれています。現在では，ジェンダーと文化に関する科目は大学院のカウンセリング心理学の訓練の必修科目になっています。もう一方で，アメリカ心理学会で，男性と男性性について扱う第 51 部会が 1995 年に開設されました。男性というジェンダーがどのようにして男性の生を形作り，同時にそれを制限しているのか，そしてどうやって男性が一人の人間としてのポテンシャルを十分に発揮出来るのかということを研究することを目的としています。この男性の心理学は，フェミニストカウンセリングや LGBT などの心理学を排除するわけではなく，むしろそのような先駆的な理論と実践から学び，相互に高め合うことを目指しています。男性的とされるものに男性自身も縛られていることを認識するのは重要です。男らしさ，身体的な強さ，職業的成功，富み，冷静沈着さ，自制，女性性の排除は，多くの男性が知らず知らずのうちに目指しています。自分が強くなくてはいけない，一家を支えなければならない，歯を食いしばってもやり遂げなければならない，という男性に暗黙のうちに期待され，男性が縛られる規範は多くあります。それらが重荷となっていても，本人はただその苦しさに気づかずにその理想へと駆り立てられることも少なくありません。

女子力と生きづらさ

私たちの日常には，このようなジェンダーとかかわる課題が溢れています。私たちは，社会に流通するジェンダーの規範を時に自分に当てはめてそれを目指したり，それを達成して楽しんだり，時にそれを重荷に感じたりもします。最近よく使われる女子力という言葉には，女性らしさに関する規範や目指す女性としての理想，などが入り込んでいます。誰が誰の女子力について語るのかということによっても，それが意味するものが異なってきます。ジェンダーについては，日常のなかであまり意識されないままに，そして本人がそうすることを意図しているかということに関わらずに語られ，行動に移されます。世界はジェンダー化されているといっても過言ではないでしょう。ジェンダーとかかわることが生きづらさをどのように作りだすのか，そしてそれらが私たちのもっている潜在力を発揮するのを妨げるのかみていくことはとても重要な心理学の課題であり，今回の公開セミナーがその入り口を作ってくださったように感じております。今後，研究や臨床実践を通してジェンダーというテーマについて皆さんが取り組まれることを楽しみにしております。

（立命館大学総合心理学部　岩壁茂）

Ⅳ　おわりに

本学センター主催第２回公開セミナーの概要について報告しました。

昨年度の初回の公開セミナーでは教員の講演・話題提供と質疑応答という形式を採っておりましたが，今回は「女性の人生と心理臨床」という一つのテーマの下，分科会を設け，大学院生による発表も織り交ぜた内容としました。昨年度に引き続き，地域の方々，OG の皆さん，全学の教職員の皆さん，大学院進学を希望する学部生など，学内外の方々が参加してくださり，感謝申し上げます。また，終了後にお寄せいただいた感想やコメントもセンター職員一同励みになるものでした。ここで誌面をお借りして御礼申し上げます。

大学附設の心理臨床相談センターは，外部の方々からは（もしかすると内部の方々からも）どのような活動をしているところなのか，そこで勤務している者がどのようなことを考え，何をしているのかが分かりづらいのではないかと思います。身近に感じていただくには，専門家とし

ての活動だけでなく，地域の方々への発信が必要ですし，外部の人に発信することは，発信する側にとっても多くの学びや気づきが得られるように思います。

また今回，昨年度に引き続きオンラインという形式で開催されたことで，遠く離れた地にいらっしゃる方々や，対面参加がかなわない方々にも，多くご参加いただくことができました。昨年度末でセンターを離れられてしまった岩壁先生にも，すぐ隣の部屋にいらっしゃるかのように自然に討議にご参加いただけたことで，残されたメンバーの中にあった寂しさが和らいだように感じます。

オンラインでの開催にはデメリットもたくさんありますが，今後もこのセミナーが，これまでにセンターと何らかの形でご縁のあった方々に，日本のどこからでもセンターに立ち寄っていただける場となれたらと願っております。声を交わせる機会となれば何よりですし，遠くから眺めて懐かしく思っていただく時間を過ごしていただくのもまた嬉しく存じます。

毎回少しずつ工夫を施しながら，多くの方に一層関心を寄せていただけるよう，この試みを継続していきたいと考えています。

（高橋哲・平野真理）

Figure 6　クロージング